

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	人間の構えのパターンとその発達と過程 : ことわざの示唆性の獲得過程
Author(s)	小泉, 節子; 本庄, ちゑ乃
Citation	児童の言語生態研究 , 8 : 9 - 21
Issue Date	1977-01-31
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045088">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045088</a>
Right	
Relation	



# 人間の構えのパターンとその発達と過程

## ことわざの示唆性の獲得過程

小泉節子  
本庄ちる乃

### I 序

(1) ことわざと構え  
ことわざには、人間の生きる姿勢と  
いってもよし、また生活の知恵といっ  
ても、許される示唆性がある。それを  
包括的にことわざの構えと呼ぶことに  
する。私たち教師は、常に子どもたち  
と接していて、やはりその子自身の姿  
勢を見ることが第一の仕事であると思  
う。その子自身が、どう考え、どう行  
動するかは、その子の意識の在り方が  
出るものであるから、それを把握してい  
くことが出来なければ、またその変革  
に手を貸すことをしなければ、その子  
自身の成長に私たちがかわっている  
ということにはならない。長い間、人  
間生活における生きる姿勢の整え方と  
して、いわゆる教訓的方向をもつもの  
として残ってきたことわざは、かなら  
ずや人間成長の過程の中で教えられ  
る教えられないとはあまり関係なく、い  
わゆる思いあたって行く、いわば人生  
の一里塚的な生き方の深みとともに、  
存在するものだと思うのである。だか  
らこの調査ではことわざのわかるわか  
らないではなく、そのことわざの構え  
と同じ構えが子どもたちにとれるよう  
になって来ているかどうかを調べよう  
とした。

### (2) 問題文

問二 次のことわざは( )の中に  
の中のことばを選んで入れると、  
意味がはっきりします。□の中  
から、ことばを選んで書きまし  
ょう。

1. 毒くらわば( ) 皿まで
2. ( ) 寝た子を起こすようなま  
ねをするな
3. ( ) 帯に短かし、たすきに長  
し
4. 思うこと、ひとつかなえば( )  
またひとつ
5. 亀の甲より、( ) 年の劫
6. かに( ) こうらに似せて穴  
を堀る
7. 正直者が( ) 馬鹿を見る

さすが せっかく かえて あ  
いにく とんとん拍子に いっそ  
のこと やっぱり

問三 上のことばと、下のことばを線で、  
むすんで、ことわざを作りまし  
ょう。

- |      |   |        |
|------|---|--------|
| 医師の  | • | • 刀いじり |
| えせ侍の | • | • 祭    |
| 怪我の  | • | • 不養生  |
| あとの  | • | • 功名   |

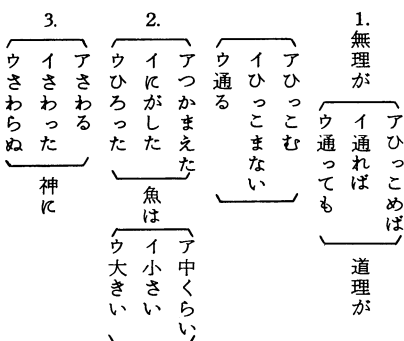
問四 次の文章( )の中に□の中か  
ら、ことばを選んで、ことわざを

作りましょう。

1. 船頭多くし( ) 船山に登る
2. かわい子( ) 旅をさせよ
3. さる( ) 木から落ちる
4. 負ける( ) 勝ち
5. 長いもの( ) まかれろ
6. かっぱ( ) 川流れ
7. 泣き面( ) 蜂
8. かえるの面( ) 水
9. 上手の手( ) 水がこぼれる
10. 馬鹿と坊主( ) 勝てぬ

は、と、し、て、には、が、も、  
の、から、に、

問四 次の文章は、うまく続けると、こ  
とわざになります。続くものを、こ  
「」の中から、ひとつ選び、記  
号に○を、つけましょう。





けない。しかし学年ごとにおける構えの習得の状態についての今後の重要な手がかりには、なり得るはずである。

次にグラフの伸び方における特徴を分類すると、だいたい次の四つの型に分類できると思う。

A型 四年生を除き、比較的順調な伸びを示す。(あいにく・とんとん拍子に・かえって)

B型 三年生、五年生(特に後者)で急激な伸びを示す。(いっそのこと)

C型 三年生で急激な伸びを示し、全体的にも正解率が高い。(せっかく)

D型 学生差があまりなく、全体的に正解率が低い。(さすが・やっぱり)

△( )内は該当する問▽  
A型について

この型に入っている構えは、「あいにく」・「さらに」・「かえって」であるが、まず「あいにく」について考えてみると、この構えは、先に述べた「崩壊」に属しているものである。この構えのもつ「崩壊」という性質とグラフの伸びのようすを重ね合わせてみると、次のようなことが考えられる。A型のグラフの伸び方が他の型と比較して激しいということは、子どもたちの生活において、学年が進むに従い、

今まで自分が経験したこともないような場面につつかり、自分のすで持っている構えでは対応できないようなことがたくさんあるということではないだろうか。言いかえれば、学年によつてずい分、子どもの構えの在り方が違うということを示しているし、常に新しい構えを形成していくようすが読みとれる。では、「さらに」・「かえって」についてはどうであろうか。これらの構えは共に、「構築」の性質を持つものである。先の「あいにく」とは「崩壊」と「構築」という性質のちがうものである。では、なぜ違う性質のものと同じグラフの型を示しているのであろうか。これは「あいにく」と「さらに」・「かえって」がちょうど表裏をなしているということを示しているのではないだろうか。つまりこのA型の中に「構築」と「崩壊」という異質の構えが入っているということは、子どもが何か新しい場面につつかった場合の構えの築き方は、今まで持っていた構えを全く否定するか、自分の持っている構えの上にさらに新しい構えを築いていくかのどちらかでしかなく、それは常に構築と崩壊が一对となつて習得されて行くということを物語っているとと思われる。

B型について

この型に入っている「いっそのこと」

という構えは、「せっかく」・「さらに」・「かえって」と同じ構築の性質を持っているが、「せっかく」は一種の抵抗心、または自分の構えに固執する性質を持っているように見られるし、「さらに」と「かえって」は、抵抗なく、すんなりと前へ進む性質を持っているように見られる。しかし、この

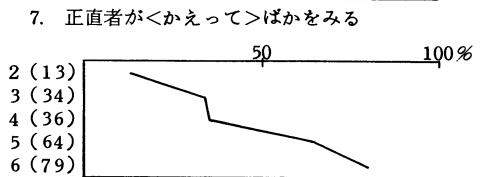
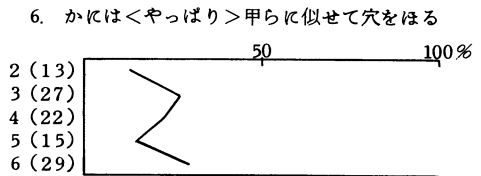
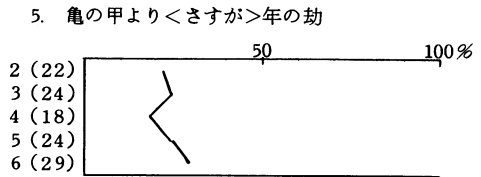
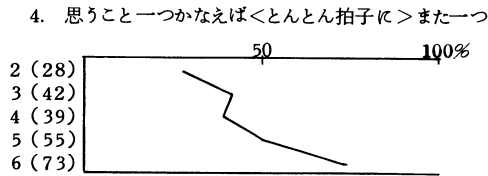
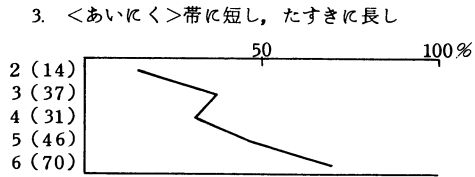
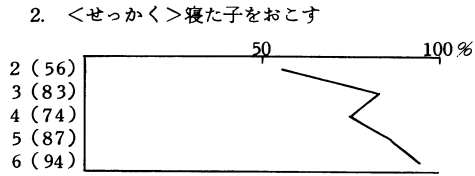
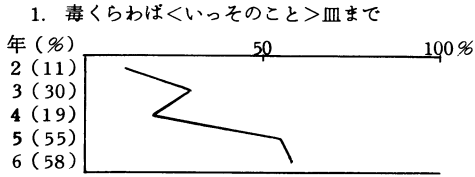
「いっそのこと」からは、一種の冒険を感じさせられる。自分の構えを認識した上で、先のことはどうなるかわからないが、とにかくやってみようという性質を持っているように見える。われわれおとなから見れば、子どもというものはずい分あぶなっかしいことをしているように思える。しかし子ども自身は、ある程度自分の構えが固まっている(認識している)おとなの目からはあぶなっかしいことでも、さほど危険とも、無鉄砲とも思っていないし、意識していない場合によくぶつかる。このことが全体的に出来が悪い原因とは、考えられないだろうか。つまりこの「いっそのこと」は自分の構えを認識した上で確得する構えであるから、子どもの中には、自分の構えに対する認識が充分に育っていないと見て取るべきであろう。しかし注目すべきことは、三年生・五年生で急激な伸びを示していることである。特に五年生の場合、四年生との差が36%もあるという

ことは、五年生において急に自分の構えに対する認識が深まることを物語っている。また三年生における伸びも五年生と同じようなことが言えると思う。つまり構えの認識ということにおける発達の在り方は三年生と五年生の時期に伸びがあるということである。

C型について

全体的に出来がよく(全て50%以上)、また三年生で急激に伸びているが他学年同士の差はあまりない。この型に入っている構えは「せっかく」であるが、先に述べたとおり、一種の固執性を持つ構えである。この構えは他のどの構えより出来がよい。このことは、日頃子どもの主張などが、いかに曲げられることが多いかということを示しているように思われる。日頃自分の主張、意志、行動がおとなやまわりの友人などのため妨げられ、思うままにできず、いつも「せっかく」したいのに」というようなことを感じ取っているのではないか。「いっそのこと」の出来が悪いということとは、子どもは自分の構えと事態との不即応の認識ができていて「いっそのこと」してみる」段階でなく、自分の構えの認識もなく「せっかく」したいのに」の段階であると考えられる。三年生で伸びているということとは、ちょうど彼らが、二年生のおとなしく親などの庇護下にある時期を過

表 I 問 1 の 正 解 率



きて、自分でどんどん行動したい時期に入ることと無関係ではないはずである。

**D型について**

この型に入っている構えは「さすが」、「やっぱり」であるが、子どもはよくこれらのことばを使用しているにもかかわらず、出来が悪い。彼らは、多分に「さすが」、「やっぱり」をひやかしのことばとして、本来の性質をぬきにして使用しているのではないか。客観的に他を見る目を持って初めて使えるこの構えは、共に停滞(回帰)の性質を持つものである。先に述べたように構えの形成において、すでに持っている構えに新しくつけ加えるのでもなければ、すでに持っている構えをくずして、新しく形成するのでもなく、もとのままにとどまるといふ性質の構えである。他のA・B・Cそれぞれの型がなんらかの形で伸びを示しているのに較べ、Dの型は、あまり伸びもせず、出来も悪い。この原因はA・B・Cそれぞれの型に入っている構えの伸びにあるのではないだろうか。つまり子ども構えは崩壊され、構築されて、どんどん新しい構えが形成されている段階にあるということである。言いかえれば、前へ前へと進みつつある毎日であるが故に、前へ進まない構え、新しく築かれることのない構えの習得の段階ではないのではないか。

ただ一つ今後の課題として考えておく必要があるのは、「やっぱり」における五年生の落ちくぼみである。わずかな落ちくぼみではあるが、他のほとんどのものにおける五年生は、割合大きく伸びているのが見られるのに、「やっぱり」における出来の悪さは、何が原因しているのだろうか。

**(二)問二、問題作成の意図**

人間が、ある対象とある対象を結びつけようとするとき、まず最初の結びつけ方は、それらの対象に対して持っている自分のイメージに頼り、イメージが重なり合うもの同士を結びつけたがるものである。たとえば、「女の子」と何かを結合させる場合、「力強い」と結合させる人は、まず「やさしい」であろう。普通の人は、きっと「やさしい」などのたぐいと結合させるであろう。これは「女の子」に対して持っているイメージと「やさしい」に対して持っているイメージが重なり合うからである。しかし、異なった対象同士を結合させる時、もしイメージが使えなければ、どうするであろう。どんな場合かと言えば、この問二であがっている「医者の不養生」という結合のしかたがそうである。「医者」に対して普通の人が持っているイメージは、「病気をなおす人」であろう。そのイメージと「不養生」の持っているイメージは、

なかなか重なり合わないのが普通である。しかし「医者の不養生」という結合をしていることわざは古来から受け継がれているものである。ということからは、人間がある対象同士を結びつける場合、どうもイメージだけに頼っているのではないということを示しているように思われる。では何によって結合させているのであろうか。これは、イメージからさらに進んで、対象と対象の関係どりをしているのではないだろうか。ある対象とある対象を結びつけることによって形成されたことわざがたくさん見つかるが、それらはほとんどイメージだけに頼ってはいては成立しないものである。このイメージに頼ることなく異なった対象を結合させていることわざこそ、日本人の持っている結合のさせ方をあらわしているものであり、この結合のさせ方に構えがあらわれていると思われる。この問二においては、異なった対象を結合させる時、子どもほどの段階でイメージに頼るのを捨て、対象同士の働きにおける関係どりに（そのかんけいどりに）は構えがあらわれるのであるが）を始めるのかを調査することを目的とした。

### 結果と考察

問二（一）「医者の不養生についてまず気が付くことは、三年生と四年生の間、四年生と五年生の間に20%近

い開きがあることである。（二）の「えせ侍の刀いじり」、（三）の「怪我の功名」、（四）の「あとの祭」では、これほどの開きはほとんど見当たらない。（ただし）（三）の三年生と四年生の間の開きを除く。またわずかではあるが、六年生で落ちくぼみが見られる。この理由を考えるにあたり、まず誤答のグラフを見た。「医者」と「功名」を結びつけているものが、他を結びつけているものと較べて圧倒的に多いことがわかった。二年生を除いて「功名」と結んだ率が高い学年ほど正解率が低かった。また三年生と四年生、四年生と五年生の間において、正解率の開きと「功名」と結んだ率の開きがほとんど同じであった。

三年生と四年生の開き (正)15%  
四年生と五年生の開き (正)17%

(功)16%  
(功)14%

これらのことからイメージ思考をする傾向の強い学年ほど出来が悪いと言えらると思う。また先ほど述べた三年生と四年生、四年生と五年生の間に見られる差は、学年が進むに従い、どんどんイメージ思考から脱却して「医者の不養生」という一種のアンバランスな結合の構えを習得していくようすを物語っていると思われる。六年生の落ちくぼみについてであるが、六年生の「功名」と結んだ率と四年生の率が非常に

近いのである。（六年生—27%・四年生—30%）。しかしこの現象を六年生も四年生と同程度のイメージ思考の段階であると判断するのは、早計であろう。全くの推測ではあるが、彼らはイメージに頼ったというよりも、「医者」と「功名」をことばとして知的に判断（意味あいから入った）した結果と考えられないだろうか。（問二（三）誤答グラフ参照）

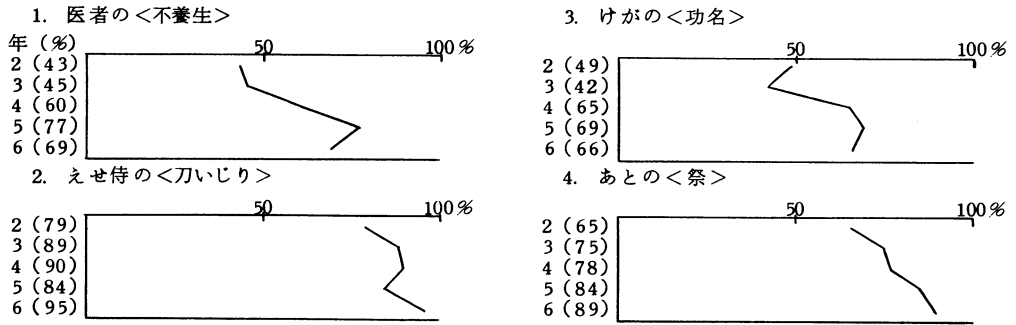
問二（二）「えせ侍の刀いじり」について

各学年とも正解率が高い。しかも大きな学年差が見られない。これは、このことわざの文章のスタイルがストーリーで、何が何をする型とでも言えるものであるからであろうか。しかし、このことわざが成立している所以は「えせ侍」の「刀いじり」で、所詮、似せ者は似せ者以上の効果を上げえないという意味か、あるいは、似せ者は似せ者らしいせめてものごまかしであったという意味が考えられる。子どもたちにこの「しよせん」とか「せめてもの」とかの意味合い、もしくは構えが習得できているとは、他の問と比較しても、どうも懐疑的にならざるを得ない。つまり子どもが「えせ侍」に全く注目せず、「侍」と「刀」とを連想的に結びつけたまでではないかと疑っている。ただ、五年生のわずかではあるが落ちく

ぼんでいる点には注目しなければならぬ。五年生は他の問においては、落ちくぼみどころか良い結果を出している。この最も簡単に、イメージ思考でできるはずの問が落ちくぼんでおり、二年生と正解率がかわらない（二年生—79%、五年生—82%）ということは、二年生とはまた違って、この結合の構えがわずかではあるが習得され出しているのだとは見られないだろうか。彼らは問二は単に、侍と刀とを連想に切り捨てようとしたのではなかったか。

問二（三）「怪我の功名」について このことわざが、「医者の不養生」の回答と違う点は、三年生と四年生の開きがどれよりも大きいこと、四年生と五年生の開きが変わることである。一方、誤答率のグラフを見ると、「医者の不養生」の回答と同じような現象があらわれているのがわかる。「怪我」と「不養生」を結んだ率が、他の結んだ率よりずっと高くて高い。やはりここでも彼らはイメージ思考をしているのである。しかし「医者の不養生」の回答と違う点、つまり三年生と四年生の間に見られる大きな開きと、四年生・五年生・六年生との間に見られる開きの少なさが、この「怪我の功名」に対する構えは、「医者の不養生」に対する構えとは違う習得のしかたを

表Ⅱ 問 2 の 正 解 率



物語っていると見えよう。「怪我の功名」は「医者の不養生」と同じような逆運想を持つ構えであるが、「医者の不養生」が「うかつさ」を扱ったものであるのに対し、「怪我の功名」は「まさか」という偶然・意外性を持つ構えである。このグラフから考えると偶然・意外性ということに四年生が最も関心を示していることになる。そしてまた、四年生以後あまり伸びないことも、問題にしてよいところであろう。

問二(四)「あとの祭」について  
 全学年とも正解率が高く、しかも学年が進むに従い、少しずつであるが伸びている。この正解率のグラフだけで見ると、この構えは早い時期に習得され、わずかずつではあるが伸びて行くと考えられるだろう。しかしこのことわざにもなう構えは、結果に至って思わくのずれていたことを判断するものである。従ってこれは原因と結果との関係を、結果において原因不足を顧みる点を指摘するものだけに、視点を二つとるものであるから、むずかしいと予想していたのである。ところがわれわれの予想はくつがえされた。しかしこれはあまり信用がおけない。理由としてわれわれの作問上の不備、失敗を反省させられる。問二は、上の四つの語句と下の四つの語句を線で結ぶという形式をとったのであるが、ちょうど

表Ⅲ 問 2 の 誤 答 率

( )内% □正解率

	刀 い じ り	祭	不 養 生	功 名
医 者 の	2 (6)	(15)	(43)	(35)
	3 (1)	(12)	(45)	(42)
	4 (2)	(8)	(60)	(30)
	5 (2)	(5)	(77)	(16)
	6 (1)	(3)	(69)	(27)
	え せ 侍 の	2 (79)	(11)	(4)
3 (89)		(5)	(3)	(3)
4 (90)		(4)	(6)	(0)
5 (84)		(5)	(1)	(6)
6 (95)		(3)	(0)	(1)
け が の		2 (9)	(9)	(33)
	3 (8)	(7)	(42)	(42)
	4 (4)	(8)	(22)	(65)
	5 (6)	(6)	(18)	(69)
	6 (3)	(7)	(23)	(66)
	あ と の	2 (7)	(65)	(19)
3 (2)		(75)	(9)	(14)
4 (4)		(78)	(12)	(6)
5 (4)		(84)	(5)	(5)
6 (1)		(89)	(6)	(6)

上、四つ、下、四つであまりがなかったことが、「あとの祭」がよく出来ている原因ではないか。詳しく言えば、正解の「祭」は先の「医者」・「えせ侍」・「怪我」のどれとも結びつきにくい。つまりイメージが結びつきにくいので、最後に残ったものどうし結びつきやすかったのではなかったかと思われるのである。学年ごとには、テストなれをしていることをあらわしているかもしれない。

問二全体を見て残念ながら、正解のグラフは、そのまま構えの習得をあらわしているものではないということになる。しかし、イメージ思考からの脱却のようすはよく出ている。それは誤答率のグラフの(一)・(三)が物語っている。各学年でイメージ思考がピークに達するのは三年生である。以後は、どんどん落ちていくのに気づく。四年生以後は、イメージ思考を徐々に捨て、対象と対象の動きにおける関係どりを求め始める。(誤答率グラフ(一)・(三)参照)  
(問一・二文責、東京・藤の台小教諭・本庄ちあ乃)

### (三)問三、問題作成の意図

助詞を入れさせる問題である。助詞の入れ方により、単語と単語もしくは、前文と後文を、どのような関係で結びつけているかが、わかる。その連結の

仕方それぞれ自体に、その子の構えが出るというふうな考えだ。たとえば(3)の「さるも木から落ちる」について考えると、「さる」と「木から落ちる」をどの語で結びつけているかで、そのことわざの構えの受け止め方がわかる。このものは名人上手といえどものもである。「必ずしも」となるとは限らない」という構えのとれる子どもは、もを入れるだろうし、その構えを知らない子どもはその他のことばを入れる以外ない。つまりことわざであるべき成立の根拠や理由がこの助詞をあやまれば瓦解するような重要ポイントが助詞にかかっているものを選んで、それを指摘させることは、ことわざの持っている構えを想定できるか否かであるとしてよいだろう。具体的にいうと、(1)～(4)までの空白の助詞を正しく入れるとそのことわざが示そうとする構えは次の(一)の中に入れたそれぞれの副詞の意味においてまとめられていると考えたのである。

- (1) 船頭多くして……………(かえって)
- (2) かわいい子には……………(あえて)
- (3) さるも……………(必ずしもとは限らない)

- (4) まけるが……………(かえって)
- (5) 長いものには……………(いっそのこと)
- (6) かげの……………(うかつ)
- (7) 泣き面に……………(さらに)

- (8) かえるの面に……………(しゃあしゃあ)
- (9) 上手の手から……………(かえって)
- (10) 馬鹿と坊主には……………(とても)

△(一)の内の副詞用語は本会の研究会で検討したものである。▽

### 問三 結果の考察

問三の正解率は表Ⅳにまとめた通りである。50%に全学年が満たないものは、(5)長いものにはまかれろ、(7)泣き面に蜂、(8)かえるの面に水、の三問である。またその他50%をこえるものも、高学年においてであって、しかもその伸びは、やはり低い。一番順調に発達していると考えられるのは、「さるも木から落ちる」のもの関係づけたといえる。全学年の発達の特徴として、確実にいえることは、(5)「長いものには」を除けば、他のことわざは二年生を最低として、六年生が最高を示し、その間、三・四・五年生に少し変動があるということである。ということは、二年生から、構えは徐々に広がっていくということになる。「長いものにはまかれろ」については、二年生から六年生を通じて、小学生の段階でこの構えを見て取ることは、全く無関係で、発達でないということになる。

次に助詞ごとに子どもたちの構えがどう分化し、どう動いたかを考えるために、誤答及び誤答率に注目してみたいと思う。

1. 「も」の構え「は」「が」の構え  
問三の誤答及び誤答率一覽(表Ⅴ)眺めてみると、注目すべき誤答がある。

- ① さるも木から落ちる(21・51・66・79・83)%  
(27・17・13・9・8)
- ② が……………(44・27・14・3・8)

これは予想通りであった。もという「必ずしも」とは限らない」という構えは高学年でない、とれないだろうという予想がたっていたからだ。そして、「さるは」とか、「さるが」とかを低学年が入れるだろうという予想である。「何がどうする」の見方の段階を卒えていなければ、「いつも」とは限らない」の見方に入れない。あるいは「さるといえども」という前提のくつがえりに思い到れないと考えていたのである。この「は」「が」二語の各の合計を出してみると、(71・44・27・16)と、その正答率とは学年発達において、全く反対の結果が出ていることが、おもしろい、また、この「は」「が」の誤答以外に他の誤答の助詞をとっていないことも、おもしろい。それから二年生のこの誤答の高さにくらべ、三年生は正誤半分半分で意識の折り返し点といえようか。たとえていえば、二年生では単に穴埋め問題ぐらいのつもりで、「さるは木から落ちる」として平然としているのが、



はて、「さるは木から落ちない」はずであったのとしている段階があり、やがて、「さるも木から落ちる」ことがあり得るといふ構え自体が動いてゆく変化が把握されたと思う。

② ③ ④ ⑤ ⑥年  
 ② ③ ④ ⑤ ⑥年  
 ② ③ ④ ⑤ ⑥年

「かっぱ」と「川流れ」をので結びつけるということ、「何がどうする」ではなくてかっぱの動作状態を一カテゴリーに指摘する。従って、他の何かの動作・状態を見て、比喩としてこの語に置き換えることわざだといえる。

「さるも木から落ちる」と内容的には等しいものを持ちながら、それを出て、比喩的働きを強めているのは、この「の」の働きである。だから、「さるも木から落ちる」よりも、構えは高級といわねばならない。「さるも木から落ちる」が三年生を50%の分岐点としたのに対し、「かっぱの川流れ」では四年生をもって境目としている。さらに、この両者を比較すると、「は」で結んだ率は、「さる」も「かっぱ」も変らない。しかし「が」で結んだ率も変らないように思われるのに、かなり異なるはどうしてだろう。よくわからぬが、この疑問は同じように「も」で結んだ率のちがいに對しても持たれ

るものである。おそらく「川流れ」の語句の理解が充分でないためと、かっぱが泳ぎ上手の印象が乏しいせいでおきたものであろう。

② ③ ④ ⑤ ⑥年  
 ③ ④ ⑤ ⑥年  
 ③ ④ ⑤ ⑥年

「が」と「は」の区別がそれほど意識的に子ども達に行なわれているとは考えられない助詞なので誤答が割とあることは考えられていた。しかし、

「が」が感情的に強調する構えを、子どもたちはうすうす感じてかその伸び率はあまり高くないにしろ、二年生、六年生まで、発達に応じて、伸びてきている。この「が」などは子どもたち自身、心の中で強く発音している「が」なのではないだろうか。ここでおもしろいのが、「も」である。「負けるも勝ちの一種である。」とする例外とか

案外とかをあらわした構えとすると、「が」の立場をこえた構えであるとも考えられる。学年順に5・1・9・2・7の%を示しており、果して、低学年にそのまでの構えが取れているかどうか疑問だが、六年生の7%には、こんな構えでもって、把握されているかも知れない。また付け加えであるが、「負けてから勝つ」が二年生の誤答に多い

のも、低学年では相反するものを同時に頭の中に置くことの出来ないところが、よく出ているように思える。

① 「には」「に」「は」の構え  
 ② 「には」「に」「は」の構え  
 ③ 「には」「に」「は」の構え

学年	は	に	には
2	21	20	38
3	12	17	58
4	5	12	61
5	6	14	64
6	4	18	74
長いもの	13	25	23
ばかと坊主	20	21	22
	14	30	22
	15	34	19
	15	35	19
	23	4	21
	22	11	31
	30	6	38
	19	6	48
	26	6	50

この結果を見て明確な事は、「には」の正答よりも、「に」「は」のそれぞ

れの誤答を加えたものの方が、%が高いということである。「長いものには」を除いて、他の二つの正答率は学年の発達に追って上昇していくが、誤答率はこの三問とも、徐々に減って来るといふことはない。特に問題と考えられるのが、「長いものにはまかれる」である。ことわざは、ある意識の状態を言いつけてはならぬ語をはめこまなければ、ことわざの構えが明白にはならない。明確な構えがあるからこそ、そのことわざが成立し、生き残ってきているわけである。子どもたち、特に高学年に「長いものには」の%が高いが、これはわからないでもない。この子どもたちには「に」でもう落ちついてしまっ

つまり「に」だろうか、「には」の場合だとうなるのだろうか。この点に關しては、高学年といえども弱いといふことがわかった。

C「きょう宿題をわすれた。」  
 T「きょうは宿題をわすれたのですか、きょうも宿題をわすれたのですか。」

一字ちがいの問答でも、にが笑いの少なかったことを思い出す。

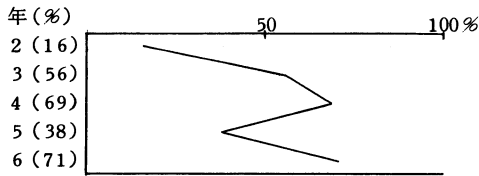
② 「に」をその構えとして持つものを考えてみる。

学年	は	に	には
泣き面	19	17	19
	5	12	5
	3	10	3
	5	8	5
	4	10	4
かえるの面	25	8	14
	11	16	26
	4	10	35
	5	10	32
	10	10	36

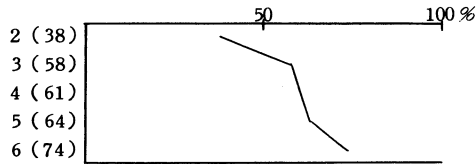
先程あげた三例とはちがいが、この二例は、年令に伴い、発達が伺える。しかし、この二例とも、最低と最高の巾が少ない。50%以下である。これは先程あげた三例とは異なり、低学年のみが、その誤答率を加えたものが正答率を上回るけれども、中・高学年では順調に発達を示している。これは同じ助詞「に」の用法ながら、「泣き面に」は(さらに)の構えであり、「かえるの面に」の「に」も同じ累加の意ながら、先の「泣き面」の場合とは効果に

表Ⅳ 問 3 の 正 解 率

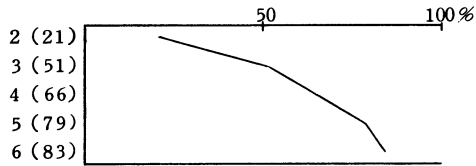
1. 船頭多くて>船山にのぼる



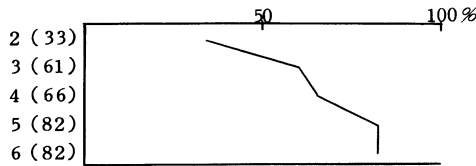
2. かわいい子<には>旅をさせよ



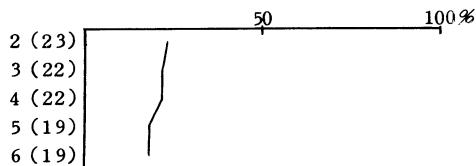
3. さる<も>木からおちる



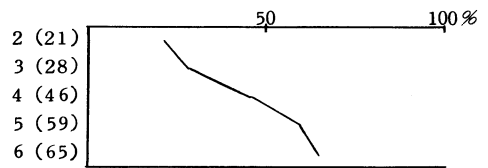
4. まける<が>勝ち



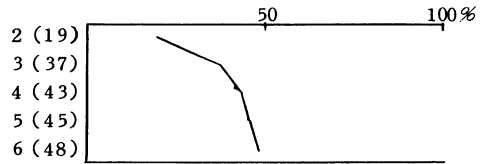
5. 長いもの<には>まかれろ



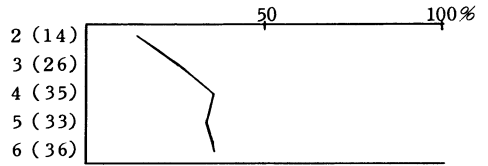
6. かっぱ<の>川流れ



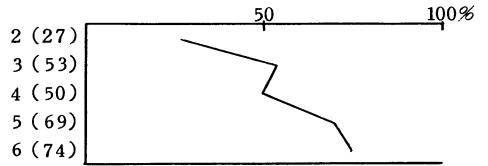
7. 泣き面<に>蜂



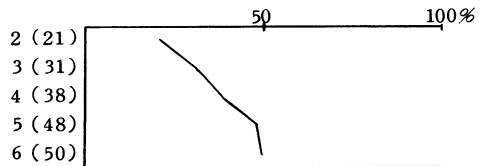
8. かえるの面<に>水



9. 上手の手<から>水がこぼれる



10. ばかと坊主<には>勝てぬ



おいては全く逆の印象を与えるものといわねばならぬ。即ち、前者はますます感情的に表情的となるのに対し、後者はますます無感動的・無表情的となる。しかし低学年にとっては同じ種類として受け止めてしまうのだから。二年生の比率が一番少く(5%)・三年生から六年生にかけては、11・8・13・12(%)となっている。

3. その他の構え

「て」と「から」という助詞の持つ構えが残った。(1)船頭多くして船山に登るも、(9)上手の手から水がこぼれるも、%が割と高い。これは、私達の予想に反した結果だった。私たちは、問題作成の時に1は、逆説的なものだし、9は時間と充足観とを考えていなくてはならない問題なので、難問と踏んでいたのである。これはことばのあてはめの方から子どもたちが考えうまく続くものを選んだともいえると思う。だが、それとしても疑問が残るのは、1の船頭多くしての五年生の%である。38%と、三年生よりも落ちるのはなぜだろうか。ことばの続き具合を考えるだけとしたら、反って、高学年の方が、上手なはずと考えられるはずと思うが、誤答例を見ても、すべての助詞に散り、定かな根拠が見い出せずにいる。これは、そのまま考え、この構えに対し、五年生位から迷いが出て来たという結

表Ⅴ 問 3 の 誤 答 率

( ) 内% □ 正解率

年	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
1 短2	(21)	(8)	(22)	(16)	(7)	(7)	(2)	(2)	(6)	(0)	(0)	(7)
2 短3	(10)	(4)	(22)	(56)	(0)	(12)	(4)	(4)	(2)	(0)	(1)	(3)
3 短4	(3)	(2)	(5)	(69)	(0)	(10)	(4)	(11)	(6)	(1)	(2)	(4)
4 短5	(9)	(8)	(6)	(38)	(3)	(3)	(3)	(11)	(9)	(4)	(2)	(5)
5 短6	(4)	(4)	(4)	(11)	(0)	(1)	(2)	(4)	(82)	(7)	(2)	(3)
6 短2	(21)	(18)	(0)	(2)	(7)	(3)	(16)	(3)	(1)	(2)	(6)	(17)
7 短3	(21)	(14)	(4)	(4)	(4)	(10)	(11)	(3)	(0)	(1)	(0)	(5)
8 短4	(9)	(17)	(0)	(3)	(11)	(7)	(11)	(0)	(1)	(4)	(2)	(9)
9 短5	(13)	(7)	(1)	(4)	(10)	(4)	(59)	(0)	(2)	(0)	(0)	(11)
10 短6	(5)	(7)	(1)	(7)	(11)	(7)	(65)	(1)	(0)	(0)	(0)	(28)
1 短2	(21)	(14)	(2)	(4)	(3)	(15)	(4)	(3)	(13)	(3)	(1)	(4)
2 短3	(9)	(17)	(0)	(12)	(0)	(10)	(28)	(0)	(0)	(0)	(0)	(17)
3 短4	(13)	(7)	(1)	(10)	(6)	(10)	(46)	(0)	(2)	(1)	(1)	(5)
4 短5	(5)	(20)	(2)	(8)	(4)	(6)	(59)	(0)	(0)	(2)	(0)	(9)
5 短6	(5)	(21)	(4)	(10)	(2)	(7)	(74)	(1)	(0)	(2)	(0)	(2)
6 短2	(21)	(18)	(0)	(2)	(7)	(3)	(15)	(0)	(1)	(2)	(0)	(3)
7 短3	(21)	(14)	(4)	(4)	(4)	(10)	(11)	(3)	(0)	(1)	(1)	(5)
8 短4	(9)	(17)	(0)	(3)	(11)	(7)	(59)	(0)	(2)	(0)	(0)	(17)
9 短5	(13)	(7)	(1)	(4)	(10)	(4)	(65)	(1)	(0)	(0)	(0)	(5)
10 短6	(5)	(7)	(1)	(7)	(11)	(7)	(74)	(1)	(0)	(0)	(0)	(2)
1 短2	(21)	(8)	(22)	(16)	(7)	(7)	(2)	(2)	(6)	(0)	(0)	(7)
2 短3	(10)	(4)	(22)	(56)	(0)	(12)	(4)	(4)	(2)	(0)	(1)	(3)
3 短4	(3)	(2)	(5)	(69)	(0)	(10)	(4)	(11)	(6)	(1)	(2)	(4)
4 短5	(9)	(8)	(6)	(38)	(3)	(3)	(3)	(11)	(9)	(4)	(2)	(5)
5 短6	(4)	(4)	(4)	(11)	(0)	(1)	(2)	(4)	(82)	(7)	(2)	(3)
6 短2	(21)	(18)	(0)	(2)	(7)	(3)	(16)	(3)	(1)	(2)	(6)	(17)
7 短3	(21)	(14)	(4)	(4)	(4)	(10)	(11)	(0)	(1)	(4)	(2)	(9)
8 短4	(9)	(17)	(0)	(3)	(11)	(7)	(59)	(0)	(2)	(0)	(0)	(11)
9 短5	(13)	(7)	(1)	(4)	(10)	(4)	(65)	(1)	(0)	(0)	(0)	(28)
10 短6	(5)	(7)	(1)	(7)	(11)	(7)	(74)	(1)	(0)	(0)	(0)	(2)
1 短2	(21)	(8)	(22)	(16)	(7)	(7)	(2)	(2)	(6)	(0)	(0)	(7)
2 短3	(10)	(4)	(22)	(56)	(0)	(12)	(4)	(4)	(2)	(0)	(1)	(3)
3 短4	(3)	(2)	(5)	(69)	(0)	(10)	(4)	(11)	(6)	(1)	(2)	(4)
4 短5	(9)	(8)	(6)	(38)	(3)	(3)	(3)	(11)	(9)	(4)	(2)	(5)
5 短6	(4)	(4)	(4)	(11)	(0)	(1)	(2)	(4)	(82)	(7)	(2)	(3)
6 短2	(21)	(18)	(0)	(2)	(7)	(3)	(16)	(3)	(1)	(2)	(6)	(17)
7 短3	(21)	(14)	(4)	(4)	(4)	(10)	(11)	(0)	(1)	(4)	(2)	(9)
8 短4	(9)	(17)	(0)	(3)	(11)	(7)	(59)	(0)	(2)	(0)	(0)	(11)
9 短5	(13)	(7)	(1)	(4)	(10)	(4)	(65)	(1)	(0)	(0)	(0)	(28)
10 短6	(5)	(7)	(1)	(7)	(11)	(7)	(74)	(1)	(0)	(0)	(0)	(2)

果ではないかと思う。単なることば自体を考えるのではなく、前文と後文の関係をしようとする所に力不足が出た様に思う。私は二年～四年生までの%の高さは、この構えが、取りうるかどうかは疑問の余地があると思う。9の上手の手からのからも、他のことばでは続かないので、この語を選択した子どもが多いと思うが、手とこぼれるから、時間的なものを子どもたちが感じ取れている。ということは誤りが無いと思う。ただ、上手すぎているからという、その裏の構えまでは、取り得ているかは疑問である。

(四)問四、問題作成の意図

構えの持つ論理性を見るために、作られたのが、この問四である。ことわざの構えの中にある論理性とは、その論理的な構成パターンを指している。そのために、論理の裏にはそれを覆す論理があるものである。二重否定することにより、もう一通りの言い回しも出来る。この二つの(構えのもの)論理をどのように子どもたちが、受け止めるか調査するために作成をした。

問四―結果の考察

「逆もまた真なりとする」というしくみを持っているものを集めて調査した。結果は表Ⅵ。

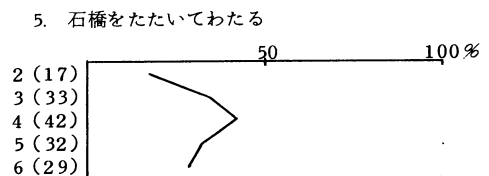
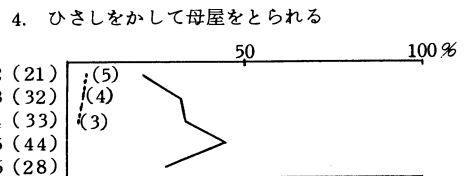
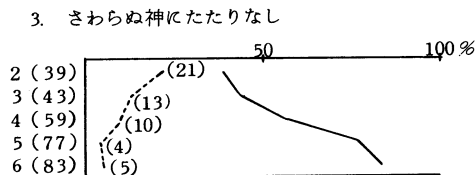
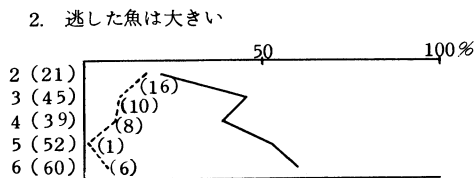
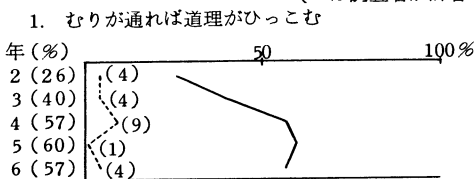
全体的にいて、論理は子どもたちがとり意外にむずかしいものであると

いうことがわかった。50%を上回るのは四年生以上である。(但し、これは1.と2.と3.とにおいてである。)そしてこの三問に限り学年発達に則って%の上昇が見受けられる。これは(1)～(3)まで即ち(1)「無理が通れば道理がひっこむ」(2)「逃げた魚は大きい」(3)「さわらぬ神にたたりなし」の論理に共通性があるからではないか。(1)は無理と道理の関係。(2)は「したからこそ」である。それぞれの前提の反比例を示しているもの。(3)は原因を作らなければ結果は生じないというもの。ということは必ず前提に対する後の処理の問題である。これらに反して、(4)「ひさしをかしめて母屋をとられる」は「さらに」という累加の形をとるし、(5)「石橋をたたいて渡るに至っては心理的な累加を意味する。単純な累加の論理ならば、子どもたちも、自分の今取っている構えで処理するだろうが、それが、マイナスの方向の累加となると、「さらに」という構えであることが見破れないのだろう。先述の「泣き面に蜂」に対する「かえるの面に水」の場合とよく似ている。「石橋をたたいて渡る」に至っては累加すべくして累加しているわけではないので、さらに当惑をしているのだろう。特に六年生が欠落しているのは、(3)の「さわらぬ神にたたりなし」が順調に高率を上げているのに反し、

(5)あえて「石橋をたたいて渡る」論理以上の用心という構えに思い到れないことが、ここに出たと見る。「石橋をたたかず渡る」↓「石橋をたたいても渡らない」という論理へと移っていくものと考える。尚、グラフでは……で示されている逆の論理を成立させて、正答を得ているものは全体に低学年に多い。これは、ことわざのしくみに低学年が慣れていないからであろうと思う。またもうひとつおもしろいのは五年生が六年生よりも逆論理を使う%が低いという点である。これは五年生を契機として、六年生では論理のしくみからいって、こういえるものであると遊びが入っているからではないかと思うのは少し考え過ぎだろうか。

— 正解(○, △も合わせた%)  
 ----- △のみの%  
 (△は調査者が許容したもの)

表Ⅵ 問4の正解率



### III 附記

(1) 他地方からの資料と、その考察  
他地方からの資料は表Ⅷの通りである。

この表と、今まで述べてきた資料とを比較して、いえることを述べたいと思う。

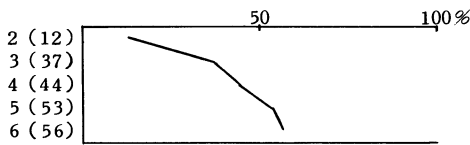
ア、全般を通じて他地方の方が正答率が高い。(これはまだ他地方ではこゝとわざが生きているからだろう)

イ、学年差を考えていくと他地方と東京地方とは大きな相違点がある。

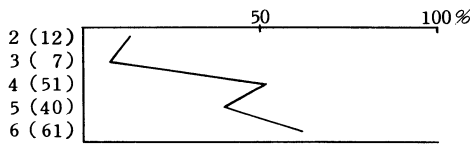
東京 二年〇三年、四年〇五年、  
地方 二年、三年、〇四年、五年、  
六年

〇は、20%以上の開きをみせているという意味である。これからいえることは、東京の子どもたちは早いうちに大きな発達を示し、しかも二段階も大きなステップがある。これに対して地方の子どもたちは、中学年で、大きく発達を示し、それ一回だけのステップである。東京の子どもたちは、早熟で、構えの変わり身も早いということになり、地方の子どもたちは、全体の理解度は高いが、おくてで、構えの変化も、回数多くないということだろう。(問三・問四・文責・東京・町田三小 教諭・小泉節子)

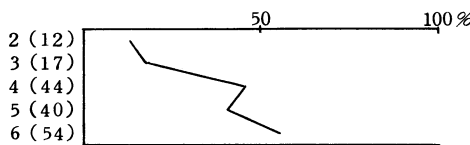
6. かっぱく>川流れ



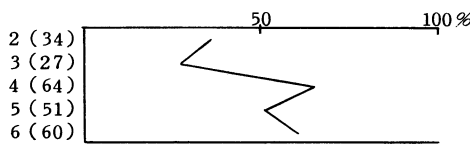
7. 泣き面<に>蜂



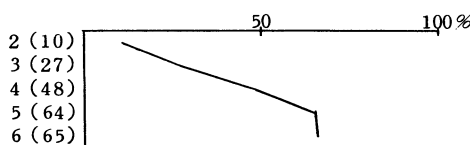
8. かえるの面<に>水



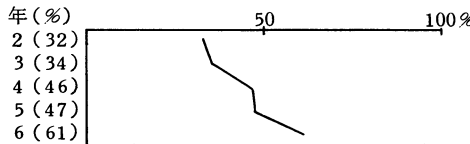
9. 上手の手<から>水がこぼれる



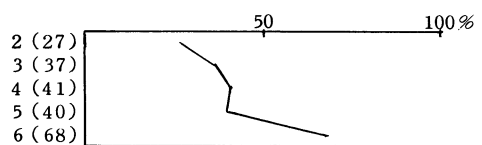
10. ばかと坊主<には>勝てぬ



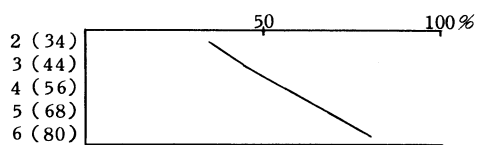
問4. 1. 無理が通れば道理がひっこむ



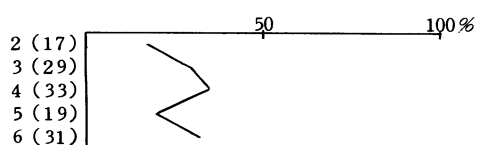
2. ながしたさかなは大きい



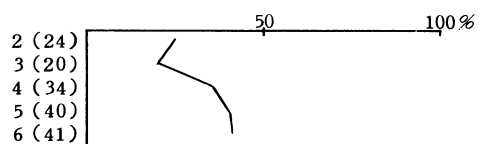
3. さわらぬ神にたたりなし



4. ひさしをかして母屋をとられる



5. 石橋をたたいてわたる



人数

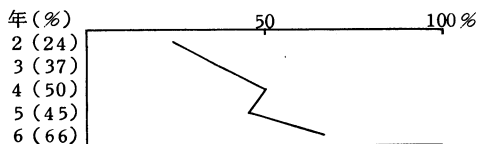
地方会員調査校  
福井県平泉寺小(二〜六年)  
福田志保教諭  
大分県西小(四〜六年)  
森田ミサ子教諭  
新潟県岩室小(二〜五年)  
小島玲子教諭

(地方会員資料集計)

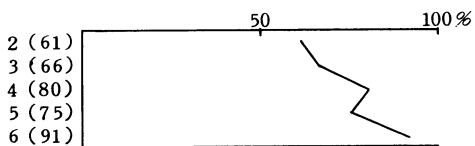
東京・松ヶ丘小教諭・粕谷典子  
二年 41名 三年 41名 四年 80名  
五年 53名 六年 86名

表Ⅶ 地方の正解率

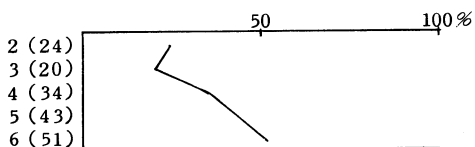
問1. 1. 毒くらわば<いっそのこと>皿まで



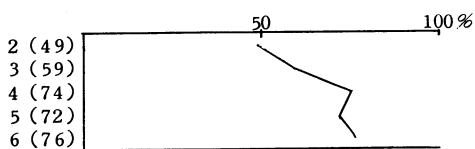
2. <せっかく>寝た子をおこす



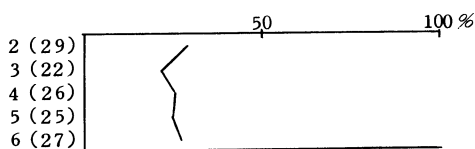
3. <あいにく>帯に短し, たすきに長し



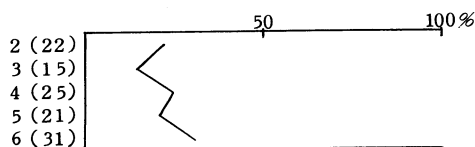
4. 思うこと一つかなえば<とんとん拍子に>また一つ



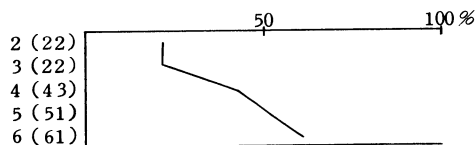
5. 亀の甲より<さずが>年の劫



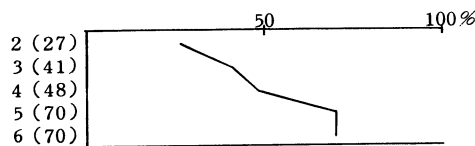
6. かには<やっぱり>こうらに似せて穴をほる



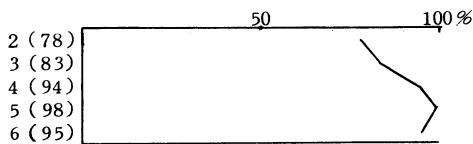
7. 正直者が<かえって>ばかをみる



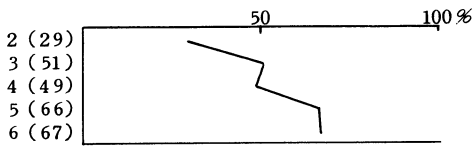
問2. 1. 医者の<不養生>



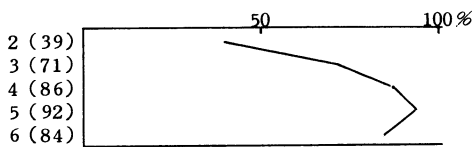
2. えせ侍の<刀いじり>



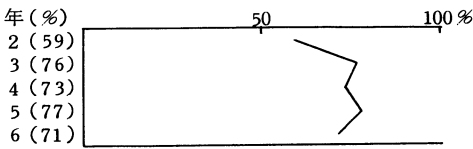
3. けがの<功名>



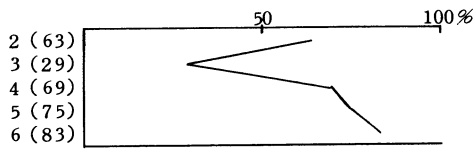
4. あとの<祭>



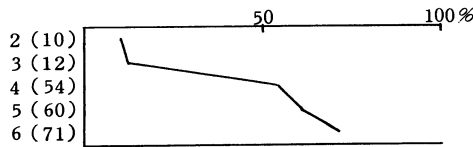
問3. 1. 船頭多くして<て>船山に登る



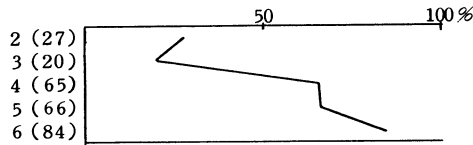
2. かわいい子<には>旅をさせよ



3. さる<も>木から落ちる



4. 負ける<が>勝ち



5. 長いもの<には>まかれろ

